

連體修飾句「<二字漢語>化+の+N」與臨時複合語
「<二字漢語>化+N」之間的差異考察
—以「高齡化」和「晚婚化」為例—

陳志文

國立高雄大學東亞語文學系教授

陳奕霈

國立政治大學日本語文學系碩士生

摘要

本文利用 BCCWJ 語料庫為資料，擷取「<二字漢語>化+の+N」和「<二字漢語>化+N」兩種形式所有例句，以「高齡化」和「晚婚化」為中心，比較兩者的差異後，得出以下結論：

- ① 「<二字漢語>化+の+N」和「<二字漢語>化+N」兩種形式在現代日本語書面語中均為常見。
- ② 在「高齡化+の+N」和「高齡化+N」中，後接名詞多為二字漢語，但「高齡化+の+N」中的後接名詞以漢語動名詞為主，而「高齡化+N」中的後接名詞則主要是漢語名詞。當二字漢語為一般漢語名詞時，兩者形式均合乎日語文法。若二字漢語為漢語動名詞或非飽和名詞，則通常使用「高齡化（晚婚化）+の+N」形式。
- ③ 在「高齡化+の+N」和「高齡化+N」中，若後接名詞為一字漢語，則「高齡化+の+N」的後接名詞通常為自立性名詞、非飽和名詞和不完全特性的名詞，而「高齡化+N」的後接名詞則常為接尾語，例如「率」等。

關鍵詞：臨時複合語、連體修飾句、二字漢語、接尾語「化」、非飽和名詞

受理日期：2024 年 03 月 08 日

通過日期：2024 年 05 月 24 日

DOI：10.29758/TWRYJYSB.202406_(42).0008

Differences between Attributive Modifiers “<Two-character Kanji> ka+ no + Noun” and Temporary Compounds “<Two-character Kanji> ka+ Noun” : using “Aging (Koureika)” and “Delayed Marriage (Bannkonnka)” as an Example

Chern, Jyh-Wen

Professor, Department of East Asian Languages and Literature, National
University of Kaohsiung

Chen, I-Pei

Master's student, Department of Japanese, National Chengchi University

Abstract

The study was conducted using BCCWJ. Focusing on “koureika” and “bannkonnka”, we used sentences with two grammatical forms "two-character kanji + no + N" and "two -character kanji + N" and further examined the differences between the two forms. We reached the following conclusions:

- ① We found that “two-character kanji + no + N” and “two-character kanji + N” are commonly used in written Japanese.
- ② In both forms “koureika + no + N” and “koureika + N”, the following nouns are mostly two-character kanji. The following nouns in "koureika + no + N" are mostly kanji progressive verb s, but in "koureika + N", regular nouns are more frequently used. If the two-character kanji is a regular noun, both forms “koureika + no + N” and “koureika + N” align with Japanese syntactic rules. If the two-character kanji is a progressive verb form or a non-saturated noun, the “koureika + no + N” is much preferable.
- ③ In both forms “koureika + no + N” and “koureika + N”, when the following noun is a one-character kanji it is often observed that “koureika + no + N” is followed by a noun that can stand alone such as a non -saturated noun or a non -finite noun. Nevertheless, the form “koureika + N” is often followed by a suffix (e.g., rate).

Keywords: Temporary Compound Words, Attributive Modifier s, Two-character Kanji Compounds, Suffix “ka”, Non-saturated Nouns

連体修飾句「<二字漢語>化+の+N」と臨時複合語
「<二字漢語>化+N」との相違についての考察
—「高齢化」「晩婚化」を中心として—

陳志文

国立高雄大学東アジア言語学科教授

陳奕霈

国立政治大学日本語文学科院生

要旨

本稿では、BCCWJを資料として「<二字漢語>化+の+N」「<二字漢語>化+N」両形式の例文を抽出し、「高齢化」「晩婚化」を中心に両者の相違を考察した結果、下記のような結論を得た。

- ① 「<二字漢語>化+の+N」「<二字漢語>化+N」の両形式は現代日本語の書き言葉においてどちらも一般的に用いられる。
- ② 両形式における「後接名詞」はどちらも「二字漢語」が最も多い。ただし、「高齢化+の+N」における「後接名詞」は「漢語動名詞」が多い一方、「高齢化+N」の場合「漢語名詞」が多く用いられている。「二字漢語」が「漢語名詞」であれば、両形式はどちらも日本語として成立する。「二字漢語」が「漢語動名詞」「非飽和名詞」である場合、一般的に「高齢化（晩婚化）+の+N」というパターンが用いられることが分かる。
- ③ 両形式における「後接名詞」が「一字漢語」である場合、「高齢化+の+N」という形式における「後接名詞」は一般的に「自立的な名詞」「非飽和名詞」「不完全名詞」のものが多く、対し「高齢化+N」の形式における「後接名詞」は「率」のような「接尾辞」が多いことが分かる。

キーワード：臨時複合語、連体修飾句、二字漢語、接尾辞「化」、非飽和名詞

連体修飾句「<二字漢語>化+の+名詞」と臨時複合語
「<二字漢語>化+名詞」との相違についての考察
—「高齢化」「晩婚化」を中心として—

陳志文

国立高雄大学東アジア言語学科教授

陳奕霏

国立政治大学日本語文学科院生

1. はじめに

「二字漢語」の研究に関して現代日本語の研究において従来盛んに行われている。以上の「二字漢語」の研究に関連して、本稿では「<漢語>化+の+名詞」という連体修飾構造と「<漢語>化+名詞」という「臨時複合語」¹との使用実態に着目する。例えば、以下の例を見てみよう。

(1) したがって、高齢化が問題であるというのは、もう一方の原因である子供の数が少なくなり、社会の活力が減退するからである。つまり 高齢化の問題 は、少産化の問題と考えることができる。(LBk3_00046、5950)

(2) たとえば、日本において長い間重要な政策争点となってきた消費税の導入は、高齢化問題 と密接に関連している。なぜならそれには、増加する社会保障支出を賄うという役割が期待されているからである。(LBj3_00155、14170)

(1)(2) のように、「高齢化の問題」と「高齢化問題」とはど

¹ この「臨時複合語」という用語は石井(2005)による。なお、「臨時複合語」について石井(1993:101)に述べられている「臨時一語」の認定基準に従う。要するに「1 複数の単語が臨時的に結びついたものである」「2-1 複合語である」、「2-2 複数の文節連続をその内部にもつことがある」、「3 もとの単語連続に復元することができる」といった条件を満たすものである。なお、こうした概念は影山(1993)の「S構造複合語」、菱沼(1983)の「臨時的な複合語」とほぼ通じている。

ちらも正しい日本語であり、意味的にもそれほど変わりはない。

ところが、このような「<漢語>化+の+名詞」の「連体修飾句」をすべて「<漢語>化+名詞」という「臨時複合語」の形式に置き換えることができるわけではない。例えば、(3)における「高齢化の進展」を(4)のように「高齢化進展」に置き換えると日本語としてやや違和感が感じるだろう。

(3) これまでは、医療と保険の分野が中心に世代間の再分配の問題が起こってきたために、保険方式が中心でありました。しかし、高齢化の進展と世代間の再分配の量的拡大が次第に非常に難しい問題をもたらしてきていることは確かであります。(OM55_00010、280960)

(4) *これまでは、医療と保険の分野が中心に世代間の再分配の問題が起こってきたために、保険方式が中心でありました。しかし、高齢化進展と世代間の再分配の量的拡大が次第に非常に難しい問題をもたらしてきていることは確かであります。

以上のことから、「<漢語>化+の+名詞」の「連体修飾句」は「<漢語>化+名詞」という「臨時複合語」形式に置き換えられる場合と置き換えられない場合とがあることが分かる。このように、片方は「AのB」という構造の「句」であり、片方は(複合)「語」である。一般的には、句の方が結びつきが自由であり語の方に漢語の後ろに一般には和語が来ないなどという制限が掛かることが多いため、通常の場合「句」は全て(複合)「語」には変換できないのが普通である。だが、実際、(1)(2)のように句から語に置き換えても文としては成立する例文も見られる。したがって、どのような場合に置き換えが可能なのかということは興味深い問題である。

そこで、本稿ではコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて、『現代日本語書き言葉均衡コーパス BCCWJ』を調査資料に、こうした「連体修飾句」と「臨時複合語」との使用実態の差異を明らかにすることを中心に考察を行う。「漢語+化」の例文を検索して

みたところ、使用頻度上位 100 語の漢語では、「～地＋化」の 1 語以外に「二字漢語」が 99 語もあることが判明した。したがって「二字漢語」を中心に考察することにした。また、『BCCWJ』の資料は膨大であり、「<二字漢語>化＋の＋名詞」という「連体修飾句」において「高齢化」という語が最も多く使われることがわかる。本稿では、研究の焦点を絞り、両者の相違をより細かく考察するために、「高齢化＋の＋名詞」「高齢化＋名詞」を中心にそれぞれの一般的差異を捉えようとする。

2. 先行研究

前述した「<二字漢語>化＋の＋名詞」の連体修飾句と「<二字漢語>＋化＋名詞」という「臨時複合語」との置き換え問題に関して、最も関連があるのは「連体修飾構造」と「臨時複合語」との置き換え問題であるが、それ以外に、「AのB」という連体修飾構造の研究、漢語接尾辞「化」についての研究とも関わりがあると思われる。よって考察するに先立ち、まずこれらの先行研究を振り返る。

2.1. 「連体修飾構造」と「臨時複合語」の置き換え問題

「連体修飾構造」と「臨時複合語」の置き換え問題に関して蔡（2007）、陳（2014）原田（2016）が参考になる。蔡（2007）では「長期的な観点」「長期的観点」のように、「連語」と交替可能な「臨時的な複合語」について、その語構成レベルの成立条件を検討するために、新聞の社説本文 3 年分における交替可能な「A的なB」「A的B」の使用状況を計量的に調査した。その結果、「A的なB」が最も活発に成立するのは、「A」「B」がともに 2 字漢語の（非用言的な）体言類という組み合わせであること、また、その組み合わせは、4 字漢語複合名詞や和語複合名詞の構成において最も優勢な組み合わせに一致・対応することを指摘している。

さらに陳（2014）では『BCCWJ』のコーパス資料を用いて連体修飾構造「具体的な＋N」及び、「臨時の複合語」形式「具体的＋N」の例文を 1,000 例抽出し、形式上の特徴・性別差・年代差などの要

因からそれぞれの使用の実態を考察した。その結果、下記の4点の結論を提示した。

- ① 「具体的な+二字漢語」も「具体的+二字漢語」も多く用いられているが、どちらかというところ、「具体的+二字漢語」は現代日本語において一般則になっていると言える。
- ② 名詞が1字漢語の場合、「具体的な+一字漢語」という形のほうが一般的である。
- ③ 漢字が五文字以上になる場合、「具体的+N」より「具体的な+N」のほうが優勢である。
- ④ 名詞が非漢語（和語・外来語・混種語）の場合も、「具体的+N」より「具体的な+N」のほうが一般的である。特に混種語では、「具体的+N」をほとんど用いられず、「具体的な+N」が用いられている。

上述した2つの論文は、ともに「〇〇的な+N」「〇〇的+N」に関するものであるが、「連体修飾構造」と「臨時複合語」との交替問題という共通点が存在しているため、参考にするところが少なくない。

2.2 「AのB」という連体修飾構造についての研究

現代日本語において連体修飾構造というところ、すぐに頭に浮かんできたのは「AのB」という句であろう。だが、寺村（1991:239）において「 N_1 ノ N_2 」という構造は、外見が簡単なだけに、その裏にある N_1 と N_2 の意味関係の多様さの中の規則性を探り出すことはむずかしい」と述べているように「なんでも結びつく」からこそ、確かに結合のパターンを類型化することは難しい。それにしても、こうした連体修飾関係について従来多く論じられている。まず、国立国語研究所（1951:155-163）では、23種に分類している一方で、森田（2007:246-247）においても「AのB」という形式を意味関係から詳しく20類に分けている。こうした分類はある程度参考にすることが出来るものの、分類が細かすぎる感があり、適用されにくい。また、奥津（1978:127）においては「ノ」が「ダ」の連体形である

と指摘している。これらのほかに寺村(1991:240-254)と西山(2003)西山(2013)の分類は比較的「AのB」構造分析を一般化したことに成功したことが評価されている。以下では、それを概観する。

2.2.1 寺村(1991:240-254)

寺村は「N₁/N₂」という構造における名詞の意味関係を統語的に考察したうえで、下記のように4分類している。

(i) 連用補語の連体化

- a. 芥川の自殺、地球の破滅、母の悲しみ
- b. ケネディの暗殺、森林の破壊、伊勢物語の研究

(ii) 述語名詞の連体修飾語化

- a. 詩人の中西信太郎
- b. 監督の西本さん
- c. 首都の東京

(iii) 不完全名詞に対する連体補語

自立性がむしろ本来的に低いというべき名詞としては、まず次のようなものがあげられよう。

前、後、上、中、下、左、右、先、端、傍、横、跡

これらの語は、つねに「Xノ～」でなければ意味をなさない。

(iv) 所有、所属、全体・一部の関係

- a. 私の本、次郎の伯父さん
- b. ブッデンブロック家の人々、会社の車
- c. 彼女の眼、カメラのレンズ、木の根

以上のように、寺村(1991:239-240)は「N₁/N₂」という構造の用法についての分析を一般化する意図が強いものの、「包括的な分類記述にほど遠い。あるいは完全にすべての型を文法の範囲で捉えることは不可能なのかもしれない。」と述べているようにまだ改善される余地があると考えられる。

2.2.2 西山(2003) 西山編著(2013)

西山(2003:16-43)は意味論と語用論の区別を明確にしなが

「 N_1 ノ N_2 」における多種多様な意味を以下の5種類に区別して論じている。

①タイプ[A]: NP_1 と関係Rを有する NP_2

例：洋子の首飾り 北海道の俳優

②タイプ[B]: NP_1 、デアル NP_2

例：ピアニストの政治家 北海道出身の俳優

③タイプ[C]:時間領域 NP_1 における、 NP_2 の指示対象の断片の固定

例：東京オリンピック当時の君 着物を着た時の洋子

④タイプ[D]:非飽和名詞(句) NP_2 とパラメータの値 NP_1

例：この芝居の主演 第14回ショパン・コンクールの優勝者
太郎の上司

⑤タイプ[E]:行為名詞(句) NP_2 と項 NP_1

例：物理学の研究(←物理学を研究する) この町の破壊(←この町を破壊する)

この西山の分類に西川(2013:65-79)では、タイプFを追加することを提案している。

⑥タイプ[F]:譲渡不可能名詞とその基体表現 NP_1

a.太郎の手、象の鼻、少年の髪、次郎のは

b.家の玄関、ホールの天井、建物の柱

c.あの車の ハンドル/ブレーキ/アクセル

西山(2013:103-121)はその後も上述した「 NP_1 の NP_2 」の5分類に関して検討を重ねた結果、[G]という分類を補足した。

⑦タイプ[G]:(1)(2)のような名詞句はその背後にウナギ文を背負っているのである。

(1) a.ウナ重のお客さん(←あのお客さんはウナ重だ。)

b.イブニングドレスの女性(←あの女性はイブニングドレスだ。)

(2) a.76m²の部屋(←この部屋は76m²だ。)

b.643mの東京スカイツリー(←東京スカイツリーは643m

だ。)

以上のように、西山と西川は、「NP₁のNP₂」という関係を7つに分類している。この分類は基準が明確であるのみならず、包括的な分類に近いと思われる。よって本稿ではまずはこの関係分類の有効性を認め、以下では、主にこの分類に基づいて「AのB」の連体修飾句を分析する。

2.3 接尾辞「化」についての研究

2.3.1 「一化」の基本義

「一化」の基本義に関してまず、田窪(1986)においてなされた「「一化」の意味は、「ある性状・状態一すること/なること」であり、実質的な意味はほとんどなく、ほぼ状態変化のサ変動詞語幹を形成する接尾辞の機能を果たしていると考えられる。前項はこの変化の結果となるべき状態、性状を表す。」との指摘は大変参考になる。また、池上(2000)にも「～化の本義は属性の変化であり、概ね「～になる(する)」で言い換えられる。「～化」が属性の変化を表すことは、「～性」との関係から見ても明らかである。『日本語教育事典』には「化」の項目に『～化』を『～性』にとり換えることができるものが多い」と書かれている。」と述べられている。

以上のように、「一化」の基本義に関して基本的には「「一化」の意味は、「ある性状・状態一すること/なること」と規定して良いようである。

2.3.2 「一化する」における自・他動詞の用法

「一化する」における自／他動詞の用法に関してまず、田窪(1986)では、意味の面から動詞の自他性について論じている。すなわち、「「弱く」なるのは「好ましく」なかつたり、「積極的な努力が要らない場合」が自動詞、「積極的な努力が必要な場合」が他動詞と分類した。」ということである。これに対し、加納(1990)では下記の2点を補足している。

- ① 人為的にもたらされる場合、「一化」が他動詞である。(～ニスルコト)

②自然発生的に起こりやすいことの場合、「一化」が自動詞である。

これに関して、山下(2003)では他動詞前接部の特徴について「「化」の前接語はプラスの意味を含む語、または人の働きかけによって生成される事物や事柄を表す。」との指摘を加えている。

また、自他両用の漢語動名詞に関して、影山(1996)では、他動詞用法が基本であり、そこから反使役化によって自動詞用法が派生されると述べている。小林(2000)(2004)では、さらに影山の意見に異を唱えている。図1のように自他の派生を一方通行に考えているのではなく、両方向の派生を認めるべきであると指摘している。すなわち、図1のようなスケールでは、他動詞用法専用の「正当化(する)」と自動詞用法専用の「深刻化(する一)」を両側に位置して、その間に自他両用動詞である他動詞用法優勢の「実用化(する)」から自動詞用法優勢の「本格(する)」へと連続的に存在しているものである。この自他動詞用法も「<二字漢語>化+の+N」を分析するのに役立つことが考えられる。



図1 小林(2000) 自他の認識の連続性

以上の研究から分かるように「一化」に関する研究は主に動詞の自他性や動詞用法に集中しているように見られる。「連体修飾構造」と「臨時複合語」との使い分け研究では「一的な」「一風な」に関する比較研究もいくつか見られるものの、「一的φ」と「一的な」に関する研究が殆どである。また、「AのB」に関する「連体修飾構造」についての研究も多く論じられているが、本稿のように接尾辞「化」に絞って、「連体修飾句」である「<二字漢語>化+の+N」と「臨時複合語」である「<二字漢語>化+N」との相違について考察するものは管見の限り、いまだなされていない。そこで、本稿では、

『BCCWJ』の資料を考察することにより、両者の使用状況を明らかにしたい。

3. 研究対象と研究方法

まず、「中納言」を用い、「〇〇化+の+N」構造を『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で検索し、使用頻度上位 100 語の「二字漢語」を抽出した。そして「〇〇化+の+N」「〇〇化+N」について使用頻度上位 50 語の用例を調査した結果を以下の表 1 に示す。

表 1 「〇〇化+の+N」「〇〇化+N」についての調査結果

	語彙	化の	比率%	化のN	比率%		語彙	化のN	比率%	化のN	比率%
1	高齢	263	27.68	687	72.32	26	一元	36	63.16	21	36.84
2	活性	237	37.50	395	62.50	27	機械	35	38.04	57	61.96
3	国際	181	56.74	138	43.26	28	正常	34	28.33	86	71.67
4	温暖	178	20.94	672	79.06	29	経済	33	80.49	8	19.51
5	情報	178	32.72	366	67.28	30	正当	31	81.58	7	18.42
6	近代	166	43.34	217	56.66	31	商品	29	4.05	687	95.95
7	民営	156	30.59	354	69.41	32	空洞	29	42.65	39	57.35
8	合理	141	28.72	350	71.28	33	社会	29	49.15	30	50.85
9	自由	130	47.62	143	52.38	34	資源	28	15.47	153	84.53
10	都市	117	78.00	33	22.00	35	証券	26	38.24	42	61.76
11	工業	103	40.87	149	59.13	36	共同	26	66.67	13	33.33
12	民主	97	41.81	135	58.19	37	事業	25	52.08	23	47.92
13	少子	91	38.40	146	61.60	38	軽量	23	71.88	9	28.13
14	効率	60	57.14	45	42.86	39	差別	23	44.23	29	55.77
15	実用	59	47.20	66	52.80	40	最適	22	40.00	33	60.00
16	適正	58	33.53	115	66.47	41	一体	21	63.64	12	36.36
17	多様	55	76.39	17	23.61	42	砂漠	20	42.55	27	57.45
18	産業	54	80.60	13	19.40	43	省力	19	30.65	43	69.35
19	安定	54	28.27	137	71.73	44	法制	19	61.29	12	38.71
20	高度	52	33.55	103	66.45	45	栄養	18	40.91	26	59.09
21	円滑	47	41.96	65	58.04	46	晩婚	18	100.00	0	0.00
22	健全	46	18.70	200	81.30	47	減量	18	66.67	9	33.33
23	具体	44	74.58	15	25.42	48	自動	18	28.13	46	71.88
24	組織	42	59.15	29	40.85	49	電子	17	53.13	15	46.88
25	標準	36	20.57	139	79.43	50	多角	17	28.81	42	71.19

表 1 からまず、「<二字漢語>化+の+名詞」という「連体修飾句」と「<二字漢語>化+名詞」という「臨時複合語」は現代日本語に

においてどちらの形式も多く用いられていることが判明した。次に「高齢化+の+N」という用例が最も多く、263例も検索されたことがわかる。ここから「<二字漢語>化+の+名詞」という連体修飾構造と「<二字漢語>化+名詞」という「臨時複合語」との関係性を明らかにするために「高齢化」を中心に考察するのが有効であると考えられる。もちろん、この両者の一般性を捉えるためには「晩婚化」が示している特殊な用法にも注目する必要があると思われる。なぜなら、「晩婚化」以外に両方とも一定の例文が見られるものの、「晩婚化」という語に限って「晩婚化+の+N」という構造はある程度用いられている一方で、「晩婚化+N」という用法が1例も見当たらないからである。

4. 考察の結果

4.1 「高齢化+の+N」「高齢化+名詞」についての考察

前述した方法をもとに『BCCWJ』を調査した結果から表2と表3のような頻度表を作成した。「高齢化+の+N」が263例検索されたのに対し、「高齢化+N」は687例であったことから、「高齢化+の+N」、「高齢化+N」、両形式は日本語の書き言葉においてどちらも多く用いられ、一般的な用法であることが示唆される。筆者は当初「高齢化+N」という「臨時複合語」の形式は一般的な連体修飾方法ではないため、「高齢化+の+N」に比べ、用例数が比較的少なくなると予測していたが、実際、「高齢化+N」の例は「高齢化+の+N」のそれよりはるかに多いことが明確になった。

表2 「高齢化+の+N」に関する調査結果

	後接名詞	実数	割合
1	進展	81	30.80%
2	進行	52	19.77%
3	影響	9	3.42%
4	問題、スピード	8	3.04%
5	ピーク、状況	7	2.66%
6	推移	6	2.28%
7	為(ため)	5	1.90%

8	程度、傾向	4	1.52%
9	課題、現状、中（なか）、速度、波	3	1.14%
10	兆し、割合、原因、下、加速、見通し、要因、始まり、	2	0.76%
11	道、期間、行方、実現、 <u>テンポ</u> 、様相、先行国家、支え、位置、方、街、社会（的費用）、勢い、水準、ウェー ート、ファクター、深化、負担、経済、重み、態様、 両方、 <u>対策</u> 、将来、一途、時、足音、両面、過程、特	1	0.38%
延べ語数		263	100%

表3 「高齢化＋N」に関する調査結果

	後接名詞	実数	割合
1	社会	525	76.42%
2	率	67	9.75%
3	対策	21	3.06%
4	時代、要因	17	2.47%
5	問題	11	1.60%
6	対応	7	1.02%
7	比率	3	0.44%
8	研究、人口、少子、	2	0.29%
9	自体、施策、市場、先進国、背景、トップクラス、企 業、 <u>速度</u> 、現象、スピード、福祉、 <u>テンポ</u> 、急ピッチ	1	0.15%
延べ語数		687	100%

表2と表3の頻度表から、まず、「高齢化＋の＋N」という連体修飾句のコロケーションでは、「高齢化の進展」「高齢化の進行」「高齢化の影響」が最も多用されていることが分かる。3者のコロケーションだけを合わせても半分の53.99%を超えている。これに対して、「高齢化＋N」という臨時複合語では、「高齢化社会」「高齢化率」「高齢化対策」が最も多く用いられていることも判明した。この3者を合計すると、用例全体の90%程度に上っている。これらから「高齢化＋の＋N」「高齢化＋N」の両形式では、冒頭の(1)(2)に示したように類似した表現が見られるだけでなく、どちらも「後接名詞」として「二字漢語」が多用されていると結論付けられる。

しかし、両者の前接語は同じく「高齢化」であるにもかかわらず、

「高齢化の問題」「高齢化問題」以外に多用されている「後接名詞」はそれぞれ全て異なっている。そのため、実際、現代日本語における慣用のコロケーションとしてかなり異なっている様相を呈していることも窺える。また、「後接名詞」はどちらも「二字漢語」が多く用いられていることが考察されたものの、「進展」「進行」「影響」は「漢語動名詞」に属しているのに対し、「社会」「対策」は「普通の漢語名詞」に属すといった「二字漢語」における異質性も指摘できよう。つまり、「進展する」「進行する」という言葉はいわゆる非対格自動詞であり、「高齢化の進展」「高齢化の進行」を元の文に還元すれば、おそらく「高齢化が進展している」「高齢化が進行している」という文になるだろう。したがってこれは西山のタイプ[E]に分類することが妥当である。ただ、「高齢化の影響」についてはこれとは別に考える必要がある。すなわち、「影響」自体は動名詞であるが、「高齢化の影響」は「高齢化が何かに影響を与えている」というよりも「高齢化によって生じた結果としての影響」ということも考えられる。ここでは「影響」は動詞的というよりも名詞的な性格も強いと考えられるからである。このことから、西山の「AのB」という構造の分類では、タイプ[E]よりもタイプ[A]に近づいているかもしれない。だが、タイプ[A]の「高齢化の問題」とも異なっていることを言わざるを得ない。「高齢化問題」は「高齢化という問題」であって「高齢化した影響」とは違うように思われる。ただ、上述の異質性が存在していることは否めないものの、実際、その両形式に共通して出現する「後接名詞」では、外来語の「テンポ」以外の「問題」「速度」「対策」が全て「二字漢語名詞」であることが考察された。したがって、「高齢化+の+N」「高齢化+N」の両形式における「後接名詞」が「二字漢語」である場合、その「二字漢語」は「漢語動名詞」ではなく、「二字漢語名詞」であれば、両形式の入れ替えが成立したことが示唆されているものではなかろうか。

さらに、「高齢化+の+N」形式における「後接名詞」では「社会的費用」「具体的な姿」などの連語が用いられることはあるものの、

「高齡化＋N」の形式では、こうした連語は見られないことも確認された。

以上のように、「高齡化＋の＋N」「高齡化＋N」の両形式においては、まず「後接名詞」としてどちらも「二字漢語」が多用されていることが分かるものの、その「二字漢語」の性質は異なっていることも窺える。「高齡化＋の＋N」という形式における「後接名詞」の「二字漢語」では「一般名詞」以外に「漢語動名詞」も用いられるのに対して、「高齡化＋N」という形式における「二字漢語」は一般的に「一般名詞」が用いられることが指摘できる。換言すれば、西山の分類タイプ [E] に属する場合、「高齡化＋の＋N」が用いられるのに対し、「高齡化＋N」が一般に用いられない。また西山の分類タイプ [A] に属する場合、「高齡化＋の＋N」「高齡化＋N」の置き換え条件が成立したということが結論付けられよう。

次は両形式におけるほかの相違も捉えようとするため、次節では、「後接名詞」の語種について考察する。

4.2 後接名詞の語種からの考察

次は「高齡化＋の＋N」「高齡化＋N」の両形式における「N」についてその語種から比較・検討する。表2と表3における「後接名詞」に関してその語種を分析すると、表4のようになる。

表4 後接名詞の語種についての分析

	1 字 漢語	2 字 漢語	3 字以 上漢語	和 語 1 拍	和 語 2 拍	和 語 3 拍以上	混 種 語	外 来 語
高齡化＋ の＋N	<u>1</u>	<u>210</u>	2	<u>0</u>	<u>16</u>	<u>13</u>	0	21
割合 (263 語)	<u>0.38%</u>	<u>79.85%</u>	0.76%	<u>0</u>	<u>6.08%</u>	<u>4.94%</u>	0	7.94%
高齡化＋ N	<u>67</u>	<u>616</u>	0	<u>0</u>	<u>0</u>	<u>0</u>	1	3
割合	<u>9.75%</u>	<u>89.67%</u>	0	<u>0</u>	<u>0</u>	<u>0</u>	0.15%	0.44%

(687 語)		%					0	
---------	--	---	--	--	--	--	---	--

表 4 からまず注目すべきは前述したとおり、「高齡化+の+N」「高齡化+N」の両形式における「後接名詞」はどちらも「二字漢語」が最も多いということである。「高齡化+の+N」の形式では「二字漢語」が 210 語で、79.85%を占めている一方で、「高齡化+N」の形式では「二字漢語」が 616 語もあり、全体の 89.67%も占めていることが分かる。この点に関しては陳（2014）において「具体的な+二字漢語」も「具体的+二字漢語」も多く用いられている」と指摘したこととも通じる。

また、「高齡化+の+N」の形式では「一字漢語」が 1 例しかないのに対し、「高齡化+N」の形式では「一字漢語」が 67 例もあることが注目される。これに関して（5）と（6）を通してその違いを考察する。

（5）六十五歳以上人口を高齡者人口とし、総人口に占める高齡者人口の割合を高齡化率（高齡者人口割合）という。この指標によって高齡化の程度をみることができる。

（PB53_00328、5780）

（6）.....パソコン業界、ひいてはIT業界はどうなってしまうんでしょうか？結論から言うと、禁止すると多少業界の売り上げは落ちますが、今後高齡化の方が早いので影響は低いです。むしろ、ゲーム機を規制されると大変な経済打撃になると思います。（OC02_05809、2150）

（7）アメリカが製造業がだめになって日本の製造しておるすばらしい工業製品を買わざるを得ないということは、情報化の方にいいのが打ちちゃって製造業に優秀なのが残らなかったわけ。（OM45_00005、600150）

表 5 を見ると、一見「高齡化+N」の形式における「後接名詞」では、「一字漢語」に 67 例もあり、多用されているような印象を受けたが、実際その 67 例がすべて（5）のように「率」という「一字漢語」の例文であった。「率」は「性・式・風・的」などと同様に一

一般的に接尾辞とされているため、「高齢化」という名詞の後ろに接続しても自然な日本語の語彙が構成される。

これに対して、(6)のように「高齢化+の+N」の形式における「後接名詞」が「一字漢語」の例文では、その「後接名詞」が「方」という漢語であることが1例見られる。『Yahoo 辞書』を調べると、「方」という語の項目には「1 方向。方角。方位。「西の—」「駅の—へ歩く」「声のする—を見る」「九州の—に行く」といったように記述されている。ここから「方」は「自立的な名詞」であり、通常接尾辞の用法を持たないことがわかる。また、この「方」は寺村が「前、後、上、中、下、左、右、先、端、傍、横」等の名詞をあげ、「つねに「Xノ～」でなければ意味をなさない」と指摘している「不完全名詞」にも属し、あるいは西山が述べている「非飽和名詞」²として認識されているものである。以上のことにより、一般的に「高齢化の方」が言えても、「高齢化方」という言い方が存在しない理由が分かる。こうした「<二字漢語>化+の+方」は(7)のようにも用いられていることから、「<二字漢語>化+の+N」における名詞が「一字漢語」の場合、その「名詞」が「不完全名詞」「非飽和名詞」に属する場合、「<二字漢語>化+の+N」という形式が用いられるものの、「<二字漢語>化+N」が用いられないことを示唆しているものが推測されよう。このことから、西山のタイプ[D]に属する場合、「高齢化+N」という形式が用いられないで、通常「高齢化+の+N」という形式しか用いられないことが言えよう。

表5からさらに「高齢化+N」という形式における「後接名詞」として「和語」が接続しないことが確認された。これに関して、(8)～(12)を考察してみる。

(8) その点で、大ざっぱに申しますと日本と西欧諸国は大体同

² 西山(1990)によれば非飽和名詞とはかならず「Xの」というパラメータを要求し、パラメータの値が定まらないかぎり、意味として完結しないものであるという。さらに西山(2003:269-270)では「非飽和名詞」を以下の5類に分けている。a.<役割>:「優勝者」「委員長」「弁護士」など b.<職位>:「社長」「部長」「艦長」など c.<関係語>:「恋人」「友達」「先輩」など d.<親族語>:「妹」「息子」「こども」など e.<その他>:「タイトル」「原因」「結果」などである。

じような高齡化の道をたどっていくというふうに見られます。(OM28_00001、174610)

- (9) ……四十代，五十代及び六十歳以上の年齢層すなわち中高年齢層の者の構成比が上昇する傾向にあり，その意味では，高齡化の波は，犯罪の世界にも着実に押し寄せつつある。(OW4X_00070、6790)

- (10) 「かなりの高齡化社会になりつつあることを考えると道は狭くなっている」と指摘、高齡化の下での社会保障費の財源確保を消費増税の理由に挙げた。二千九年度の税制抜本改革で検討する意向を示唆したとみられ、政府・与党内の議論にも影響を与えそうだ。(OY14_00385、8900)

- (11) 今では寿地区は六十歳以上の人が住民の3人に1人の割合でいる、〈超高齡化の街〉になっているのである。こうした高齡者の九十六%は男性であり、その大多数が単身者である。(LBn3_00101、32280)

- (12) ○林（義）国務大臣小野委員御指摘のように、小さな政府ということではなくて、高齡化のとき、に一体どうしていくかということは、我々がこれから本当に真剣に考えていかなければならない問題であろうと思います。(OM41_00007、756020)

(8)～(12)に示したように「高齡化のため」「高齡化の道」「高齡化の波」「高齡化の下」「高齡化の街」「高齡化のとき」という言葉は用いられるが、「高齡化ため」「高齡化道」「高齡化波」「高齡化下」「高齡化街」「高齡化とき」は通常日本語としては不適格である。この違いはおそらく『高齡化』のNは句であり、語種制限は最初から適用されないことによるものであろう。

こうした結果は陳（2014）などを参考にすれば、やはり「高齡化+N」という形式において、「後接名詞」は一般的に「和語」が接続しないことが示唆されている一方でもう一つの原因が考えられる。すなわち、(8)～(12)における「後接名詞」の「道」「波」「下」

「街」「とき」という語彙は前述した「自立的な名詞」に属しているということである。

以上のように、「高齢化+の+N」の名詞は、基本的には「の」に後接するので、「自立的な名詞」に属するのに対して、「高齢化+N」の名詞は臨時複合語の一部であるため、自立的でなくてもよい。したがって「自立的な」一字漢語が現れる場合、「高齢化+の+N」という形式が成立する。また、「高齢化+N」は臨時であるとはいえ、複合語であるため、その名詞に非漢語が現れる可能性は少なくなることが考えられよう。

4.3 「晩婚化+の+N」についての考察

表1の調査から「晩婚化」という語彙において特殊な傾向が見られた。すなわち、「晩婚化+の+N」がある程度用いられている一方で、「晩婚化+N」という用法が1例も見当たらない。これは「<二字漢語>化+N」という句と「<二字漢語>化+N」という臨時複合語との差異を捉えるうえで、もう一つの手掛かりになるのではないかと思われる。(13)～(24)は「晩婚化+の+N」例文に見られる出現のパターンである。

(13) 男女ともに晩婚化の傾向、年下の男性との結婚の増加（千九百八十年の十一・七％から千九百九十三年に十六・一％と「年上妻」は増加している）、初産年齢の上昇、少子化の傾向等々、話題となっている事象を取り上げてみても、女性のライフスタイルの変化は時代の趨勢であり、誰も止めることはできない。(LBk3_00100、7330)

(14) 厚生省の「第二回人口問題に関する意識調査」（九十五年）が明らかにした「晩婚化の理由」では、「結婚を選択しない人の増加」（生涯未婚率は九十五年で男性九・〇七％、女性五・二八％）が男女とも第一位、ついで男性では「経済的ゆとりがない」、女性のほうは「女性の経済力向上」となっている。(LB13_00081、110420)

(15) 男性三十代の未婚率もすごいけど晩婚化の原因を探りたい

ので、二十五歳から三十五歳までの女性にいったいなんで結婚しないのか、…… (OY14_26810、1970)

- (16) ここでは、近年のデフレ下における経済の低迷の影響を念頭に置きながら、未婚化や晩婚化の現状と要因について考察する。(OW6X_00069、1690)
- (17) 未婚化、晩婚化の傾向 次に、八十年代後半までの出生率低下の主要な要因と考えられる初婚率の低下についてはどうか。(OW6X_00447、44480)
- (18) 世帯数は、早婚化と晩婚化の二極化と子どもは二人から三人となり世帯人員が二、五人で横這うため、…… (PB53_00349、12910)
- (19) 1. 未婚化、晩婚化の進展 近年、結婚しない未婚の人や結婚を遅らせる晩婚の人が増えているといわれている。(OW6X_00069、1930)
- (20) 七十年代後半からの未婚化、晩婚化の進行、長寿化による元気な親の増加などを背景に、若年の未婚者と親の同居率は、九十年代に入るまでは上昇してきた(前掲付表3-1-1)。(OW6X_00069、55650)
- (21) さらに子育てそのものの負担感が増大していることなどを背景とした、晩婚化の進行等による未婚率の上昇にあると考えられてきた。(OW6X_00020、9530)
- (22) ……晩婚化の影響によって有配偶女性が非労働力化する年代が二十歳代後半から三十歳代にシフトし、子育て期に当たる三十歳代の労働力率が低くなっていることがうかがわれる。(OW6X_00516、14000)

まず、(13)～(15)では「晩婚化の傾向」「晩婚化の理由」「晩婚化の原因」が用いられているのに対して、「晩婚化傾向」「晩婚化理由」「晩婚化原因」が用いられないことが分る。これは「傾向」「理由」「原因」が一般の二字漢語名詞であるにもかかわらず、場合によっては「晩婚化+N」という用法が用いられないことを示唆してい

る。これに関しておそらく「傾向」「理由」「原因」の名詞は西山が示している「e.<その他>」の「非飽和名詞」に属しているため、「臨時複合語」が用いられないことが推測されよう。

また、(16)～(20)では、連体修飾関係をはっきりさせるために「の」による「名詞句」が形成されたことが考えられる。すなわち、単なる「未婚化、晩婚化」は「現状と要因」「傾向」「二極化」「進展」「進行」を修飾しているという統語関係を明らかに示すため、文法的な要因によるものであろう。

そして、(21)(22)に見られた「晩婚化の進行」「晩婚化の影響」という存在は実に注目される。「進行」と「影響」に関しては、上述した「高齢化」において分析した際にも同じ結果が確認された。これは「高齢化」についての分析の妥当性が裏付けられたものではないかと考えられる。すなわち、後接名詞の「二字漢語」が「漢語動名詞」である場合、「<二字漢語>化+名詞」というより、一般的には「<二字漢語>化+の+名詞」の方が用いられるということが結論づけられる。先行研究においても、「漢語+接尾辞+N」という臨時複合語において後接名詞が「二字漢語」が比較的多いことが言及されているものの、本稿のように「二字漢語」の性質についてさらに詳細に考察したのは管見のかぎりなされていないように思われる。これは漢語動名詞が西山(2013)の、行為名詞NP₂と項NP₁というタイプ[E]の性質を有するからであると、理解できよう。

以上のように本稿では、「<二字漢語>化+の+N」「<二字漢語>+化+N」の両形式について「高齢化」「晩婚化」を中心に考察し、その使用実態をある程度浮き彫りにしたことが言えよう。

5. おわりに

本稿では、「中納言」というコーパスアプリケーションを用いて『BCCWJ』における「<二字漢語>化+の+N」「<二字漢語>化+N」両形式の具体例を調査した。その結果「<二字漢語>化+の+N」「<二字漢語>化+N」の両形式は現代日本語の書き言葉におい

てどちらも一般的に用いられていることが判明した。

また、「<二字漢語>化+の+N」という例文を抽出したところ、「高齡化+の+N」という構造は最も多い 263 例が検索された。そこで、次に「高齡化」を中心に両者の差異について考察を進めた。その結果「高齡化+の+N」「高齡化+N」の両形式における「後接名詞」はどちらも「二字漢語」が最も多いことが窺えた。ただし、「高齡化+の+N」における「後接名詞」の「二字漢語」は「漢語動名詞」が多い一方、「高齡化+N」の「後接名詞」の「二字漢語」は「一般名詞」が多く用いられていることが確認された。「二字漢語」が「一般名詞」である場合、「高齡化+の+N」「高齡化+N」の両形式はどちらも日本語として成立できる。「高齡化の進行」「高齡化の影響」「高齡化の進展」、「晩婚化の進行」「晩婚化の影響」「晩婚化の傾向」「晩婚化の理由」「晩婚化の原因」などが示したように「二字漢語」が「漢語動名詞」や「非飽和名詞」である場合、一般には「<二字漢語>化+N」より「<二字漢語>化+の+N」のほうが用いられることが結論できよう。

さらに「高齡化+の+N」「高齡化+N」の両形式における「後接名詞」が「一字漢語」である場合、「高齡化+の+N」という形式における「後接名詞」は一般的に「不完全名詞」「非飽和名詞」のような属性の名詞であるのに対して、「高齡化+N」の形式における「後接名詞」は「率」のような「接尾辞」が多いことが明らかになった。また、「高齡化+の+N」における「後接名詞」が「和語」の場合、一般的に我々が認識しているように「高齡化+の+N」における「後接名詞」が「自立的な名詞」の「和語」であれば、あまり制限がない。一方、「高齡化+N」形式における「後接名詞」では、「和語」は一般に用いられないことも確認された。

しかしながら、「<二字漢語>化+の+N」の「連体修飾句」と「<二字漢語>化+N」という「臨時複合語」との使用実態を考察するには「高齡化（晩婚化）+の+N」「高齡化（晩婚化）+N」の例文を分析するだけでは、十分とはいえない。今後、より一層精度をあ

げるため、さらにほかの「<二字漢語>化+の+N」の「連体修飾構句」と「<二字漢語>化+N」の「臨時複合語」を全般的に考察する必要もあると考えられる。また、「晩婚化」という語に関しては、「晩婚化+の+N名詞」という形式が用いられているものの、「晩婚化+N名詞」という形式が見られないという点についてその理由や背景に対する分析も十分とは言えない。これらの点に関して今後の課題としたい。

<付記>

本稿は「第7回東アジア日本研究者協議会」（2023年11月4日東京外国語大学）において発表した内容を加筆・修正したものである。その席上において多くの方々からのご教示をいただいた。なお、本研究は国科会（台湾）プロジェクトの助成金によるものでもある。（プロジェクト番号：112-2410-H-390-005-）。ここにあわせて記して感謝申し上げる。

参考文献

- 池上素子(2000)「「～化」について一学会抄録コーパスの分析から一」『日本語教育』(106)、東京、日本語教育学会、pp.27-36
- 石井正彦（1993）「臨時一語と文章の凝縮」『国語学』(173)、東京、国語学会、pp.91-10
- 石井正彦（2005）「語構成研究と連語」『国文学解釈と鑑賞』70(7)、東京、至文堂、pp.130-140
- 奥津敬一郎(1978)『「ボクハウナギダ」の文法 ダとノ』、東京、くろしお出版、p.127
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』、東京、ひつじ書房、p.211
- 影山太郎（1996）『動詞意味論一言語と認知の接点一』、東京、くろしお出版、p.203
- 加納千恵子（1990）「漢字の接辞的用法に関する一考察-2-「化」の品詞転換機能について」『文芸言語研究 言語編』(18)、茨城、

- 筑波大学文芸・言語学系、pp.69-78
- 加納千恵子(1991)「漢字の接尾辞的用法に関する一考察(4) AJN 機能を持つ漢字について」『文芸言語研究 言語編』(20)、茨城、筑波大学文芸・言語学系、pp.43-59
- 国立国語研究所(1951)『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』、東京、秀英出版、pp.155-163
- 小林英樹(2000)「漢語動名詞の自他」『日本語教育』(107)、東京、日本語教育学会、pp.75-84
- 小林英樹(2004)「「化」について」『現代日本語の漢語動名詞の研究』、東京、ひつじ書房、pp.168-193
- 蔡珮菁(2007)「連語と交替可能な臨時的複合語の語構成新聞社説における「A的なB」と「A的B」の場合」『日本語の研究』3(3)、東京、日本語学会、pp.17-32
- 田窪行則(1986)「一化」『日本語学』5-3、東京、明治書院、pp.81-84
- 陳志文(2014)「「具体的+N」と「具体的な+N」についての考察—『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における使用実態—」『国語学研究』(53)、宮城、東北大学大学院文学研究科「国語学研究」刊行会、pp.1-15
- 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』、東京、くろしお出版、pp.240-254
- 西山祐司(1990)「『カキ料理は広島が本場だ』構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句—」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』(22)、東京、pp.169-188
- 西山祐司(2003)『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』、東京、ひつじ書房、pp.16-43
- 西山祐司編著(2013)『名詞句の世界：その意味と解釈の神秘に迫る』、東京、ひつじ書房 pp.16-43
- 西川賢哉「「NP₁のNP₂」タイプF：譲渡不可能名詞NP₂とその基体表現NP₁」西山祐司編著(2013)『名詞句の世界：その意味と解釈

- の神秘に迫る』、東京、ひつじ書房、pp.65-79
- 原田朋子（2016）「接尾辞「的」の連体修飾用法「一的 ϕ 」と「一的な」に関する」一考察』『同志社大学 日本語・日本文化研究』(14)、京都、同志社大学日本語・日本文化教育センター、pp.1-27
- 菱沼透（1983）「語構成と語の意味複合名詞について」『講座日本語教育』(19)、東京、早稲田大学、pp.101-111
- 森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』、東京、東京堂出版、pp.246-247
- 山下喜代(2003)「字音接尾辞「一化」について」『青山学院大学文学部紀要』(44)、東京、青山学院大学、pp.119-132